



教えるということ

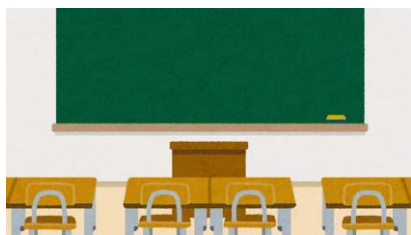
雨続きの9月が終わり、10月になりました。今年度も残り半分ですね。早いなあと思うと同時に、後半も子どもたちがより楽しい学校生活が送れるよう頑張っていかなければ、という気持ちでネジを巻く自分がいます。そこで、今月の校長室だよりは、いつもと違ってそうした自分に向けて書いてみたいと思います。もし、読んでいてつまらなかったらごめんなさい。

大村はまさんという方がいます。もうすでにお亡くなりになっているので、いましたの方が正しいかもしれません。先日ふとしたきっかけで、この方が書かれた『教えるということ』という本を再読しました。大村はまさは、1906年(明治39年)にお生まれになり、1928年に国語教師として長野県の高等女学校に赴任されました。以降、戦前から50年以上にわたり戦後の新制の中学校でも教壇に立ち続けた方です。著書『教えるということ』は、その大村はまさが、若い先生方にプロの教師としての心構えや教育の本質を説いた講演録です。この本は、今から50年以上前に発刊されたのですが、令和となった今でもその内容は色あせていません。それどころか、後に出された新編の本の帯には、「子育てに迷える人に出会ってほしい本 No.1!」と書いてありました。どういうことかと裏表紙を見ると、「『教師』を『親』に置き換えて読んでみてください。」とあります。そうすると、タイトルの「教えるということ」は「育てるということ」に読み替えられるかもしれませんね。

では、その本の中で、大村はまさは何を語っているのでしょうか。

一つは、「教える」ことの本質は、「子どもをただかわいがるのではなく、一人でも力強く生き抜く人間に鍛え^{きた}上げることである」と言っています。鍛えるというと、つい厳しく指導することのよう気がしますが、そうではありません。その子が一人で生きていかなければならないときに泣くことのないように力をつけてやることこそが本当の愛情だということです。それ故、「一生懸命指導したんですけど」などという言葉は、教師の無責任だとも言い切ります。つまり、大村はまさんの厳しさとは、子どもへ向けたものではなく、我々教師に向けられた言葉なのです。

また、「教師の資格」について、「教師は成果を出さなければならないプロフェッショナルであり、そのために学び続けなければならない」とも言っています。教師が子どもを好きなのは当たり前で、そこに甘えて幸福感^{ひた}に浸っているのは、子どもは伸びない。専門職としての実力を持つことが子どもを幸せにする唯一の方法だと言います。そして、「仏様の指」というお話を紹介されます。



「ある男が引いている荷車がぬかるみにはまりました。男が懸命に引いても動かずに苦しんでいるとき、仏様がそっと指で車に触れると、車はすっと抜け出せました。しかし、男は仏様に助けられたことは永遠に知りません。自分の力でやり遂げたという自信と喜びをもって去って行きました。」というお話

です。もし、男が仏様に助けられたら、きっと感謝して仏様にひざまずくでしょう。しかし、それではこの男の生き抜く力は何分の一かに減ってしまうのです。このことから、本当に一流の教師は、子どもが教師の手助けを受けたことに気づくことなく、自分の力でできたと思わせるというのです。そう考えると、私はまだまだ二流だなあとと思います。

さらに、教師という仕事はこわい仕事だと言っています。「楽しい」ではなく「こわい」というのはどういうことでしょう。それは、「教師」は、「先生」という敬語に足るだけの人になる覚悟をもち、自分に対して非常に厳しさのいる職業だからと言っています。そうした覚悟がないと、子どもが好きだけの甘えた考え方に^{おちい}陥ってしまうとも言います。何ともストイックな考えですが、大村はまさんは、この他にも教師としての^{きようじ}矜持を厳しい言葉で、教師としての^あ在り方を問いかけています。

もちろん、この本が発刊された当時とは、社会状況や教育環境はずいぶん変わっていますし、学校に求められるものも、変化したように思います。何十年と教師をしてきた私ですが（だからかもしれませんが）、時にその変わりように戸惑うことがあります。

しかし、私は、この本を読むたびに、大村はまさんの厳しい言葉が、不思議なほど^ふ腑に落ちるのです。それは、時代は変わっても、教師として大切にしなければいけないことが、そこにあるからかもしれません。そして、自分は本当に子どもたちの力を伸ばすことができているのだろうか、教師として学び続けているのだろうか、自分自身に問い直します。

私にとって、「教えるということ」の正解は、まだ見つかっていません。ですから、これからも悩み、考え、学びながら、子どもたちの前に立ち続けたいと思います。

仮設校舎の建築が始まります

昨年の校長室だよりでもお知らせしましたが、本校の管理棟（職員室・校長室や理科室・音楽室のある建物）の建て替え工事が、いよいよ始まります。本体の解体や建設工事は、来年度から始まりますが、それに先立ち仮設校舎の建築が、11月の最終週より行われます。

2階建てのプレハブ校舎を運動場の南側に建設し、春休みに引っ越す予定です。仮設校舎には、普通教室も3教室入るので、次年度は、一部学年の教室配置も変わります。そして、何よりも大きな影響は、校舎建築に伴ってこれから3年間もの間、運動場が半分以上使えなくなることです。本校の運動場は、天王寺区の小学校で一番広いのですが、工事期間は一番^{せま}狭くなるかもしれません。ですから、子どもたちの体力維持にはいろいろと手を尽くしていきたいと考えています。また、工事の^{しんちよく}進捗状況は、^{ずい}随時お知らせしていくつもりです。

現在のフルサイズの運動場を使った大きな行事は、11月15日（日）に行われる地活協主催の地域運動会が最後になるでしょう。先日、地域からの参加募集を配りました。ぜひたくさん子どもたちに参加してもらって、運動場での楽しい思い出を作ってほしいと思います。

